

単身高齢者の在宅生活を支える「食」を中心とした 生活の安定化に関するプロセス

—M-GTAを用いた食事サービスに関する質的研究—

友永美帆¹⁾, 野村知子¹⁾, 杉澤秀博²⁾, 武安眞珠³⁾, 渡邊範江³⁾,
片寄あつみ³⁾, 及川正文³⁾, 横瀬香織³⁾

1) 桜美林大学, 2) 桜美林大学大学院老年学研究科, 3) 公益財団法人調布ゆうあい福祉公社

1. 目的

本研究は、次の2つの目的をもって行われた。

一つは、単身高齢者が健康的に在宅生活を維持・継続するためには、どのような要素が必要になるかという視点である。高齢者のみの世帯が増える中、配食サービスは地域の見守りや安否確認が期待できるサービスとして注目されており、安心して在宅生活を送るための必要な支援である。単身高齢者の在宅生活の安定化に関するプロセスを質的に分析することで、健康的に生活を維持するにはどのような要素が重要であるのか、配食サービスを利用している利用者を対象に、生活を維持するメカニズムの一端を明らかにしたいと考えた。

二つめは、住民参加型食事サービスが、利用者にとってどのような意味や効果をもたらしているかを明らかにするという点である。住民相互の支え合い活動である住民参加型食事サービスを通して、利用者の健康と栄養の確保、定期的に地域の配達者と接する効果について明らかにする。

2. 対象と方法

住民参加型食事サービスを20年以上行っているA福祉公社において、配食サービスを利用している利用者10名に、半構造化面接による聞き取り調査を行った。対象者の年齢は79歳～93歳、家族構成は、単身世帯10名(うち日中独居1名含む)である。調査対象者に対しては、調査の趣旨と個人情報保護の保護および協力について、口頭にて説明し書面による同意を得て実施した。分析方法は、木下康仁による修正版グラウンデッド・セオリー・

アプローチによる質的分析手法を用いた。

3. 結果

配食サービスを利用する単身高齢者の10人の語りから明らかになったことは、様々な不安や持病を抱えながらも、自宅で生活を送り続けたいという思いが強く、その生活を維持・継続できるよう、主体的に生活を組み立て、コーディネートしているということである。生活の安定化を図るための中心層に、「食中心の生活の組み立て」というコアカテゴリーがあり、2つの次元と9つのカテゴリー、29の概念で構成される。2つの次元の1つは【生活の安定化】であり、どのようにして単身高齢者が安心した在宅生活を維持するかを明らかにしている。2つめは、背景要因である【不安だらけの生活】であり、単身高齢者の在宅生活における不安の要素を示している。

4. 考察および結論

配食サービスを利用し、「食」を中心とした生活を組み立てることにより、生活のリズムができ、健康的な生活が送れるようになる。また、おいしい食事は生きる楽しみになり、定期的に訪れる配達者との会話、安否確認や体調不良時における迅速な対応など、配食サービスの利用に伴う安心感が多く存在する。単身高齢者は、「不安だらけの生活」から、安心感を求め、「食」を中心に生活を組み立てることにより、生活の安定化が図られることが明らかになった。

本研究は、平成22年度厚生労働科学研究費補助金の助成によるものである。

2714

定年退職男性がボランティア活動を生活習慣化させる プロセスに関する研究

——食事サービスボランティアに関する質的検討——

野村知子¹⁾, 杉澤秀博²⁾, 友永美帆¹⁾, 吉岡英司³⁾,
武安眞珠³⁾, 渡邊範江³⁾, 大澤英児³⁾

1) 桜美林大学, 2) 桜美林大学大学院老年学研究科, 3) 公益財団法人調布ゆうあい福祉公社

＜目的＞定年退職男性の地域貢献は、地域社会の活力を維持する面と、高騰する医療費を抑制するという観点からみて、社会的に注目されている。本研究では、定年退職男性がどのような経緯でボランティア活動を生活習慣化させていくのか、そのプロセスを明らかにすることを目的としている。

＜方法＞住民参加型食事サービスを20年以上行っているA福祉公社において、配食サービスボランティアを行っている定年退職後の男性10名に、半構造化面接による聞き取り調査を行った。A福祉公社では、365日1日2食の食事を提供し、1時間800円の謝礼が支払われる有償ボランティアの組織に調理と配達を委託している。配達は、車で一人が15～18個の弁当を基本的に手渡しし、約1時間半で配る。対象者の年齢は61歳～73歳、家族構成は、夫婦世帯9名、単身世帯1名であり、活動歴は、10ヵ月から12年の間である。分析方法は、M-GTAによる質的分析手法を用いた。倫理的配慮としては、桜美林大学の倫理審査委員会の承認を得ている。

＜結果＞6つの次元と13のカテゴリーと38の概念で構成されている。まず、ボランティア活動＝他人の役に立つ活動に参加する動機づけとして【無為な日常からの脱出】の次元がある。これを構成するカテゴリーは、＜やりがい欲しい＞と「定年後の健康悪化」「つまらない時間」「家庭からの脱出」「無職の居心地の悪さ」からなる＜脱出した日常＞と＜参加しやすい条件＞である。やりがいを求めて活動に参加することで＜充実時間の復活＞がもたらされる。このカテゴリーは、＜喜び

を実感できる相手のある活動＞と仲間を得るといふ＜地域の居場所＞のカテゴリーのサポートをうけて実現する。この3カテゴリーによって2つの次元である【やる気を取り戻す自分】へと変わることができる。特に食事の配達は直接相手の喜ぶ姿を目の当たりにできることから「やりがいを実感できる」活動なのである。さらに、活動を継続させていく中で、人のための活動から自分のための活動へと意識が変化していく。そこには＜自分が元気になれる＞という実感と自己体験の振り返り、健康悪化期再来の恐怖という形で、認識される。この循環を強めるべく、他にも身近に活躍できるボランティア活動へ参加したり、地域貢献活動への参加など、＜ボランティア予定の充実＞をはかっていく。これらが、本研究の目的である「ボランティア活動を生活習慣化させるプロセス」の一つの流れである。もう一つの流れは、「担い手」から「利用者」へのイメージ転換が図られ【未来の私たちの活動】と捉える認識の変化があげられる。これは、高齢者への配食活動による「相談員との連携」「定刻配達の努力」「安否確認」「安心感を届ける」から構成される＜援助スキルの蓄積＞と＜利用者関係深化＞で構成される【活動理解の深化】と、活動や個人的体験を通した＜高齢者理解の深化＞と＜コミュニティ意識の醸成＞による【地域貢献への認識形成】がその背景となる。これら2つの流れにより、定年退職男性はボランティア活動を生活習慣化させていくものと思われる。本研究は、平成22年度厚生労働科学研究費補助金を得て行われている。

